けた種が *M. kraepelini* 〔Mitteil. Naturhist. Mus. xxiv, p. 99, text-figs. 10-17, Pl. I, figs. 21-22 (1907)〕であるが 今回の沖繩產は此の種に同定すべきで當眞氏の殊勳を顯彰すべく和名に氏の姓を頂戴してトウマフサヤスデと定め，第2の產地として沖繩本島首里を記錄して置くものである（採集年月日は不分明になつた)。其の後1909年にアテムスは此の屬の第2の種 *M. schultzei* を南アフリカより報じ[12]近く1924年フェルヘフは第3の種 *M. mjöbergi* を西オーストラリアから記載した[13]。トウマフサヤスデはアテムスの原記には部分圖のみであるから微小且つ不良な標品ながら勇を皷して世界最初の全形圖を作つた。相當模式圖的になつたのは止むを得ないことである。(10月30日)

チャグロサソリとカネグロサソリ*

高　島　春　雄

東京文理科大學動物學教室

§ チャグロサソリ再說

昭和15年11月30日日本動物學會例會で「日本產全蠍目及脚鬚目」と題して講演した時竹脇潔博士から東大理學部動物學教室に永らく保存の標本に臺灣產(?)とラベルを附した大きな蠍があることを承つた，今年9月に至り同博士の御芳志で其の標本を借用調査するを得た。乾燥標本でラベルには“Formosa ?”とある。乍併此のサソリの產地を臺灣とすることは既往の知見が許さない。南方共榮圏のどこかの產であるが此のラベル以外何の手懸りも無い。私は此の標本をチャグロサソリ *Heterometrus longimanus longimanus* (Herbst, 1800) の♂と看做す。背甲長は正中で測つて14粍，前腹長26.5，後腹は反轉して丁度刺螫する時のやうな姿勢で固まつて居るので長さは42〜45粍かと想はれる。右の觸鬚を測ると轉節長5.5粍，腿節長18，脛節長19，掌長17，指長18

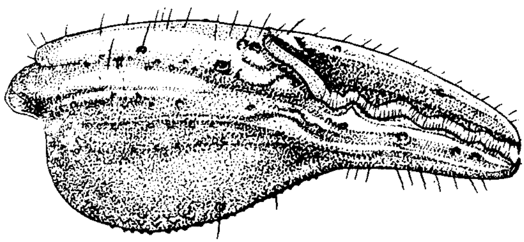
12) Attems, C. Denkschr. medic. u. natu w. Ges. xiv, p. 33, Pl. III, figs. 67-70 (1909)

13) Verhoeff, K. W. Ark. Zool. xvi, no. 5, p. 38 (1924)

* 東亞產全蠍類脚鬚類の調査（其の六）

である。尙竹脇博士より同教室所藏の蠍標本をもう一つ拜借した。ラベルには SP. NO. 386 *Buthus* Scorpionida, Arachnida Elopura Borne とある。チャグロサソリ成雄と判斷する。從來私の檢した本種の♂は總べて乾品であつたが，之は液浸で柔軟な狀態に於て保存され觀察に便利した。背甲長は正中で測つて15粍（前葉端から測れば17）前腹長 32.5，後腹長 62，左の觸鬚につき計測するに（右のものは掌と指とが缺損）基節長 6 粍，轉節長 8，腿節長 21，脛節長 22，掌長 22，指長 21，右の第 步脚長 34 粍 第 2 步脚長 36，第 3 步脚長 41，第 4 步脚長 48（以上爪共）である。永らくアルコホルに保存された爲黑味若しくは靑黑味は全く失はれて居る。

岡野喜久麿氏から南方共榮圏のどこかで捕れたサソリ 1 頭を拜受した。未だ成長の餘地あるチャグロサソリの♀と考へる。石川重治郎氏の御芳志による 2 頭もチャグロサソリと判斷した。スマトラのメダン在住の氏の友人より落掌なさつたものでメダンより 50 粁程奧地のドスウル產である。予の檢し得た最初のスマトラ產標本である。1 頭は成雄であり 1 頭は全長 34 粍位の小者ながら旣に♂としての二次性徵を具有して居た。但し色彩の上では黑味或は靑味は殆ど無く上面は赤褐色で步脚の跗節のみ黃褐色，毒囊は上面も下面も袋部は黃白色で針色のみ赤褐色。山村八重子女史から拜受のフィリピン產（バシラン島？）のサソリ（未だ成長の餘地ある本種の♀）の右第 1 步脚跗節の基部に赤褐色の蟻が 1 頭しつかり食ひついて居た。蟻だけを離さうとしたが駄目で食ひついた儘跗節がもげて仕舞つた。安松京三學士に鑑識して頂いてオホヅアカアリの 1 種 *Pheidole* sp. と判つた。



第 1 圖

チヤグロサソリ♀の左手部上面觀（×2）〔原圖〕

	(性)	(產地)	(背甲長)	(前腹長)	(後腹長)	(標本所藏者)
10	♂	スマトラ	13.5 粍	36	48	高島
11	♂	スマトラ	7	14	13	〃
12	♀	フイリツピン	11	←	約 35	〃
13	♀	?	11.5	29	約 39	〃

	(觸鬚基節長)	(同轉節長)	(同腿節長)	(同脛節長)	(同掌長)	(同指長)	(櫛狀器齒數)*
10	4.5	7	16.5	18	18	13	右17左17
11	—	3	6	7	7.5	6	右15左15
12	—	4	9	10	10	12.5	右15左15
13	4	4.5	10.5	11	11	13.5	右15左15

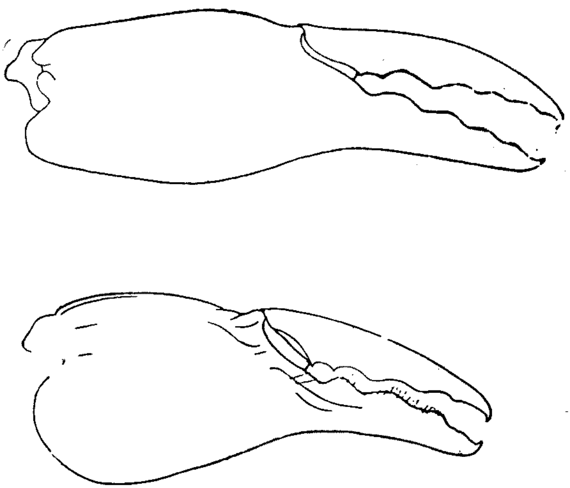
本種の雌雄を判別せんには次の諸點に注意すれば宜い。1) 雄では觸鬚の腿節以下は何れも雌のより長く鉗の形は殊に目に着き易い。2) 雄では掌部の上面も下面も縱走する肋條が顯著で平滑感が少い。3) 雄では後腹部長が雌のそれより稍々長い。4) 雄では性扉の下端は左右兩半がピツタリ接合せず多少の隙間が肉眼でも認められる (乾品では駄目)。兩半は別々に動く。

§ カネグロサソリ

從來私の檢した海南島の蠍はヒノモトサソリとマダラサソリのみで漆黑雄偉のカネグロサソリを入手することが出來ず渇望久しきものがあつた。カネグロサソリは獨立の種とする學者もあるけれども私は Kraepelin に從ひチャグロサソリの亞種と看做して居る。偶々田邊操氏の報文を得て氏が泰國の南部で此のサソリを採集したとて實大の寫眞を揭げて居られるのを知り，氏に標本借覽方をお願ひした處寛大なる氏は採集品中の 2 頭をお借し下さつたことを深謝するものである。1942 年泰國南部ナサンの近くにあるコブケブの産である。チャグロサソリとカネグロサソリの區別を自身で納得せんには第一に生時の色彩を觀ることが肝要であらう。液浸にしては此の頃は赤味が強くなつて來る。カネグロサソリの名の起りである鐵黑色とチャグロサソリの茶黑色とを明確に識別するのは私の手許の標本では出來ない相談である。併しカネグロの方に黑味の強い個體の多いのは事實であらう。背甲や前腹部に於ける顆粒の多寡，隨つて平滑感の强弱も賴りにならない。♀の觸鬚の掌の上面に於ける平滑感は恐らく重要な識別點とならう。即ちカネグロでは網目樣の皺襞の發達は小區域で，點刻が成す列 (掌の基部から指の基部に走る) は數條鮮かに認められる (♂では餘程不分明でチャグロサソリの♂或は♀に於けると煺らない)。尚毒嚢の色彩による識別をも Kraepelin は指摘して居る。カネグロの方は漆黑色でチャグロの方は明るい黃赤色乃至赤褐，稀に暗褐色だとある。所檢 2 頭のカネグロは上面觀

---

* 東大理學部動物學教室所藏標本の內乾品のものは左右共15齒，液浸のものでは左右共 16 齒である。



第 2 圖　泰國產カネグロサソリの左手部上面觀.
上は♂下は♀ (×2)〔原圖〕

では少くとも袋部の上半は黑い（標本になつたチャグロでは毒囊全體茶色になつて居ることが多い)。今回拜借の2頭は僥倖にも雌雄で雌は田邊氏の報告中に寫眞になつて出て居る。フォルマリン液浸で體硬化し計測に頗る不便ながら♀で背甲長 15 粍, 前腹長約31, 後腹長約 48, 大腮長 10, ♂も略々同大である。

(性)	(觸鬚轉節長)	(同腿節長)	(同脛節長)	(同掌長)	(同指長)	(櫛狀器齒數)
♀	6.5	13.5	14	14.5	18	右15左16
♂	8	19	19	17.5	19.5	右17左17

私は從來文獻の上からカネグロをチャグロの亞種と看做して居たが實物を檢するに及び矢張り亞種として扱ふのを至當とする結論に達した。カネグロサソリの泰に分布することは知られて居らぬやうで, 果して然らば田邊氏の報告は 1 新產地を提供されたことになる。尙私は此のサソリの毒性は大したものではないと思つて居る。

10月下旬仙臺市齋藤報恩會博物館を見學し一階陳列室に大きなサソリの在るのを見た。之は成雌と幼生 18 頭とを液浸にしたもので“後印度ラングーンビクトリア公園 1933. 西田廣吉” とある。私の檢するを得た 3 頭目のカネグロサソリであつた。之はビルマ產であるからカネグロの方もビルマ, 泰, 佛印, 南支と相當汎い分布區域を持つことが察せられる。チャグロサソリと何處まで並行して分布するものであらうか。

最後にカネグロサソリの學名に關し寸言する。Kraepelin (1904 Zool. Anz.)

は "Pocock に據る時はカネグロサソリ *Heterometrus longimanus silenus* (E. Simon) は *H. longimanus petersi* Thorell とせねばならぬ" と述べて居る。Pocock (1900 Fauna Brit. Ind.) は Kraepelin の指定した頁に於て (ポ氏は *Heterometrus* でなくて *Palamnaeus* を用ひる) "*P. petersii* の名は 1876 年 Thorell が交趾支那產のものに與へたのが始まりで, 同じ物を Simon は 1872 年 *megacephalus*, C. Koch と誤認して記載且つ描畫し後 1882 年に至り *silenus* と再命名したのである" と述べて居る。即ちカネグロサソリは Pocock は *P petersii* がいゝとして居る。Thorell (1876 Ann. Mag. Nat. Hist.) の報文を覽ると氏は *Heterometrus* の他に此の時 *Palamnaeus* n. g. を創設したのであつて, 其の genotype を *P. petersii* n. sp. とし *Heterometrus megacephalus*, Simon を其の種の synonym として居る。私は今日まで *H. longimanus silenus* の學名を用ひて來たけれども結局は *Hetrometrus longimanus petersii* (Thorell, 1876) に準據することにならう。尙カネグロサソリをチャグロサソリの亞種と看做す限りに於て後者の學名は *H. longimanus longimanus* (Herbst, 1800) となる。

§ 文 獻 追 加

1876 Thorell, T. On the Classification of Scorpions Ann. Mag. Nat. Hist. ser. 4, vol. xvii, no. 97, pp. 1-15

1919 吉井信照 馬來半島に於ける余の猛獸狩 pp. 21-24, fig. 15
揭出の寫眞はチヤグロサソリの雌らしい。此のサソリに刺螫されても大したことの無いのを文中の 2 實例が證明して吳れる。

1942 高島春雄 東亞產全蠍類脚鬚類の調査 (其の五) Acta Arachnologica vol. vii, no. 1, pp. 24-30, 2 figs.

1942 田邊 操 泰國に於ける重要なる人體寄生蟲病及び醫學に關係ある動物二三 訪泰醫學親善團報告 pp. 143-214, 15 figs., 5 pls. [pp. 201-202, fig. 14]

1942 平坂恭介 海南島の動物概觀 昭和十五年度臺北帝國大學第一回海南島學術調査團報告書 pp. 5-12, 2 pls.

1942 常木勝次 戰線の博物學者 北支・蒙古篇 [サソリと兵隊 pp. 3-6]

1942 古川晴男・高島春雄 南の動物 [高島 密林の毒蟲サソリ pp. 164-174, figs. 62-66]